道綽禅師と親鸞聖人

林　智康

はじめに

親鸞（一一七三―一二六三）の著述の中に、七高僧の一人である道綽（五六二―六四五）の著『安楽集』がどのように影響を及ぼしているであろうか。親鸞の主著『教行信証』行巻に五文、信巻に五文、証巻に一文、化身土巻（本）に六文、化身土巻（末）に一文、計十八文引用されている。また行巻の終りにある「正信念仏偈」と、『浄土文類聚鈔』にある「念仏正信偈」にそれぞれ道綽讃八句が引かれ、両偈とも同文になっている。さらに『入出二門偈』に道綽に関する文が二十句あり、そして『高僧和讃』道綽讃に七首の和讃が見られる。その他の著述では『唯信鈔文意』に『須弥四域経』の文、『浄土和讃』諸経讃や『御消息集』第四通・第五通に『目連所問経』の文をそれぞれ引かれているが、これは『安楽集』より引用されたものである。しかしこれらの経は現存していない。

この論文では、道綽の思想が親鸞の教義体系にどのように展開されているのかを、『安楽集』の引用文を中心に考察してみたい。

一、道綽と『安楽集』

南山律宗の祖である道宣（五九六―六六七）の『続高僧伝』二〇巻の「釈道綽伝」によれば、[1]道綽は十四歳で出家し、『涅槃経』の研究に励み、それを講ずることが二十四回に及んだといわれる。その後、実践的教団を率いる慧瓚（五三六―六〇七）のもとで、戒律と禅定を修学した。これが後の道綽教学に影響し、理論面から実践面へと転換することになる。そして四十八歳の時に、石壁山玄中寺において、曇鸞（四七六―五四二）の碑文を見て浄土教に帰し、その後『観無量寿経』を講ずること二百遍、晩年には日課称名念仏が七万遍に及んだと記されている。

『安楽集』上下両巻の構成は次の如くである。「総じて十二の大門有り。皆経論を引きて証明し、信を勧めて往を求めしむ」[2]と、全体十二大門（上巻三大門、下巻九大門）から成り、[3]諸経論を引用して証明し、阿弥陀仏に対する信心を勧め、極楽浄土へ往生せしめることを目的としている。

（上巻）

総説

第一大門―時機相応の浄土教

（一）教興所由
（二）説聴方軌
（三）発心久近
（四）宗旨不同
（五）諸経得名（現行本には説明がない）
（六）説人差別（　　同　　）

第二大門―浄土の菩提心、浄土教批判の破釈
第三大門―難行道と易行道、自力と他力
（下巻）
第四大門―念仏三昧と念仏者の得益
第五大門―難行道と易行道聖道門と浄土門の勝劣
（七）三身三土
（八）凡聖通往
（九）三界摂不
（一）菩提心義
（二）破異見邪執…料簡別時意
（三）広施問答…三不三信
（一）難易二道
（二）劫之大小
（三）輪廻無窮…聖浄二門
（四）引証勧信
（一）念仏大徳所行
（二）諸経所明念仏…始終両益
（三）念仏三昧利益
（一）修道延促
（二）禅観難易
（三）此彼浄穢
（四）引証勧信

第六大門―十方浄土と極楽浄土の比較
（一）十方西方比校
（二）義推
（三）経教住滅
第七大門―穢土と極楽浄土の勝劣
（一）二土取相
（二）二土修道
第八大門―往生浄土の意義
（一）経論勧説
（二）二尊比校
（三）往生意趣
第九大門―穢土と極楽浄土の比較
（一）二土苦楽
（二）二土寿命
第十大門―西方浄土と仏果
（一）十方来生
（二）回向義趣
第十一大門―広く往生浄土を勧める
（一）勧託善知識
（二）死後受生勝劣
第十二大門―『十往生経』を証拠として往生浄土を勧める
（一）総結勧信

『安楽集』は諸経論五十余部の文を引いて『観無量寿経』の要義を示し、安楽浄土の往生を勧めたものである。本書に引用される経論名を挙げると、経では『大無量寿経』三十二文、『観無量寿経』八文、『涅槃経』十五文、論

では『大智度論』十二文、『浄土論』五文等、数多く引かれる。また本書は『観無量寿経』の講義録（注釈書）と見られるが、注目すべきことは、浄土教系の『大無量寿経』や『浄土論』の文が多く引用されていること、曇鸞の『往生論註』を重視し、上巻第二大門の（三）広施問答にある第十一問答の文のほとんどが、『往生論註』からの引用である。(4)

二、『安楽集』上巻の内容

第一大門では九門を作り料簡（解釈し明らかにすること）して文を述べる。まず（一）教興の所由では、浄土教が興る理由を明かしている。(5)

第一大門の中、教興の所由を明かして、時に約し機に被らしめて浄土に勧帰せしむれば、若し教時機に赴けば、修し易く悟り易し。若し機と教と時と乖けば修し難く入り難し。

最初に、教法が時代と根機（人間）にかなっていなければ効がない、すなわち「約時被機」（時に約し機に被らしめる）という時機相応の教法を強調する。その後に『大集経』（巻五五意、月蔵分第十七分布閻浮提品）の五箇五百年説の文を引いている。第一の五百年―解脱堅固、第二の五百年―禅定堅固、第三の五百年―多聞堅固、第四の五百年―造寺堅固、第五の五百年―闘諍堅固とあり、道綽は第四の「造寺堅固」の語の後に、『大集経』の原文にない「修福懺悔」の語を付け加えている。そしてさらに、(6)

今の時の衆生を計るに、即ち仏世を去りたまひて後の第四の五百年に当りて、正しくこれ懺悔修福し仏の名号を称すべし。若し一念阿弥陀仏を称するに、即ち能く八十億劫の生死の罪を除却せん。

と、道綽の時代は第四の五百年である「造寺堅固」にあたり、懺悔修福と称名を勧め、さらに称名による滅罪を述

べている。

（四）宗旨不同においては、『観無量寿経』は観仏三昧を宗とし、その観仏を仏の悟りそのものを示す理観でなく、阿弥陀仏（仏身）と浄土（仏土）を示す事観とする。道綽は前に成立していた浄影寺慧遠（五二三―五九二）の『観無量寿経義疏』二巻や天台大師智顗（五三八―五九七）撰の『観無量寿経疏』、および嘉祥寺吉蔵（五四九―六二三）の『観無量寿経義疏』などが理観の念仏を説くのに対し、道綽は『安楽集』において事観の念仏を述べるのである。(7) 続けて『観仏三昧経』（巻一意）を引いて、諸仏出世の三種利益を述べる。

（一）十二部経の法施利益、（二）諸仏の身相の光明、無量の妙好による利益、（三）念仏三昧の利益

念仏三昧の利益については、次の如く釈尊と父の浄飯王の対話へと展開する。釈尊が浄飯王に念仏三昧を行ずることを勧められ、念仏の功を譬喩でもって説かれる。悪臭を放つ伊蘭林の中に芳香な牛頭栴檀の一木があれば、香樹の栴檀は悪臭の伊蘭林を香美に改変させるように、衆生の念仏の心は衆生の身の三毒（貪欲・瞋恚・愚痴）・三障および無辺の重罪を滅することができる。三障とはさとりへの道を妨げ、善心を害する三種の障害、①煩悩障、②業障（五逆・十悪等の悪業）、③報障（悪業の果報として受ける地獄・餓鬼・畜生等の苦しみ）のことで、合わせて惑・業・苦という。したがって、衆生は念仏を積み重ねれば必ず浄土に往生できると述べられる。

さらに『華厳経』（晋訳巻五九意）に、(8)

> 譬へば人有りて翳身薬を持ちて処々に遊行するに、一切の余人是の人を見ざるが如し。若し能く菩提心の中に念仏三昧を行ずれば、一切の悪神一切の諸障是の人を見ず。所詣の処に随ひて能く遮障すること無きなり。何が故に能く爾るとならば、此の念仏三昧は、即ち是れ一切三昧の中の王なるが故なりと。

と、菩提心の中で念仏三昧をすれば、あらゆる悪神や諸障はこれを妨げることができない。この念仏三昧は一切の

三昧の中の王であるからであると述べる。ここでは観仏三昧と念仏三昧は同意として述べられる。

（七）三身三土の義を明かすところでは、阿弥陀仏の身土等について説示する。[9]

問うて曰く。今現在の阿弥陀仏は是れ何なる身ぞ、極楽の国は是れ何なる土ぞや。答へて曰く。現在の弥陀は是れ報仏、極楽宝荘厳国は是れ報土なり。然るに古旧相伝へて皆阿弥陀仏は是れ化身、土も亦是れ化土なりと云へり。此れを大失と為すなり。

と、阿弥陀仏は報仏、極楽国土は報土とする。そして道綽は「古旧の相伝」である慧遠や智顗の『観無量寿経』の注釈書に述べる仏身・仏土観を大失であると批判する。すなわち慧遠の『観無量寿経義疏』では阿弥陀仏を「応身寿命有長有短」とし、智顗の『観無量寿経疏』では極楽を「凡聖同居土」としている。[10]

以下、弥陀身土の報仏報土を『大乗同性経』・『観音授記経』・『宝性論』等の経論によって論証している。これは後の善導における「指方立相」や「是報非化」へと関連してくるのである。

第二大門では、三番の料簡があり、（一）菩提心義では発菩提心を明かし、菩提心が願生心に結帰することを示す。ここでは一に菩提心の功用、二に菩提の名体（三種の菩提―法身菩提・報身菩提・化身菩提）、三に発心に異なりがある（三種の菩提心）。四に問答解釈から成り、浄土門の「往生成仏」と「菩提心」とがどのような関連があるかを述べている。

（二）破異見邪執では、九種の異見邪執を挙げて、それを破斥し会通する。破斥の対象である九種の偏執は次の如くである。

①大乗無相の偏執、②愛見大悲の偏執、③心外無法の偏執、④穢土願生の偏執、⑤浄土苦楽の偏執、⑥願生小乗の偏執、⑦兜率勧帰の偏執、⑧十方随順の偏執、⑨別時意趣の偏執

この九種の偏執は、道綽当時の中国仏教界の浄土教に対する論難である。その中の第九番目に別時意趣がある。無著の『摂大乗論』（真諦訳）に説く四意趣（仏の四種類の方便説―平等・別時・別業・衆生楽欲）の一つで、遠い未来（別時）に得る利益をすぐ（即時）に得られるかのように説くことで、摂論学派は『観無量寿経』の念仏往生を別時意趣とし、念仏は単に仏縁を結ばせるだけの往生の遠因にすぎないと主張した。

第三大門では四番の料簡があり、（一）難易二道においては、龍樹・曇鸞の意によって難行道・易行道を弁じている。「龍樹菩薩云く」とあるが、その文は曇鸞の『往生論註』冒頭の部分である。

（三）輪廻無窮では、「無始世劫より已来、此の三界・五道に処し善悪二業に乗じて苦楽の両報を受け、輪廻無窮にして生を受くること無数なることを明かす」とし、その中の第五番目の問答に、聖道・浄土二門の判釈をくだし、末法の時代には浄土の一門こそ通入すべき道であることを力説している。(11)

第五に又問うて曰く。一切衆生皆仏性有り。遠劫より以来応に多仏に値ふべし。何に因りてか今に至るまで、仍自ら生死を輪廻して火宅を出でざるや。答へて曰く、大乗の聖教に依るに、良に二種の勝法を得て、もって生死を排せざるに由りてなり。是れをもって火宅を出でず。何者をか二と為る。一には謂く聖道、二には謂く往生浄土なり。其の聖道の一種は今の時証し難し。一には大聖を去ること遙遠なるに由る。二には理深く解微なるに由る。是の故に『大集月蔵経』（巻五五意）に云く。「我が末法の時の中に億億の衆生、行を起し道を修せんに未だ一人も得る者有らず。当今は末法にして、現に是れ五濁悪世なり。唯浄土一門有りて通入すべき路なりと。」是の故に『大経』（巻上意）に云く。「若し衆生有りて、縦今一生悪を造れども、命終の時に臨みて十念相続して我が名字を称せんに、若し生れずば正覚を取らずと。」

一切衆生は皆仏性があって遠く久しい昔から多仏に値っているのに、どうして今まで自ら生死の迷いを輪廻して

火宅の世界を出ることができないのであるのかという問いに対して、まず、大乗仏教の聖教によると、二種の勝法によって生死を排除しないから、また火宅を出ることができないと述べる。次にその二種の勝法は、一つには聖道門であり、二つには往生浄土門であって、前者の聖道門は今の時代では証を得られないとし、二由一証（二つの理由と一つの証明の文）を出す。二由とは、一つは大聖釈尊が涅槃に入られてから、すでに長い年月が経っている（時）、二つには仏教の道理は深いにもかかわらず、衆生の理解する能力が乏しい（機）、という時と機の両面でもって、聖道の法門の難証性を指摘している。次に一証とは、『大集月蔵経』（『大集経』巻五五意、月蔵分第十七分布閻浮提品）の文で、末法の時代には行を起こし道を修する聖道の教えは誰も証ることができず、ただ浄土一門のみ証に通入できる路であると述べる。そして、時代と人間とが全く一致する時機相応の実践行として『大無量寿経』の第十八願取意の文を出し、十念の称名を浄土門の往生行と示している。

三、『安楽集』下巻の内容

『安楽集』下巻の第四大門では三番の料簡があり、（一）念仏大徳諸行には、中国の三蔵法師並びに大徳が聖教を詳かに知って西方浄土に帰依されたと述べた後に[12]、菩提流支三蔵（六世紀頃）・慧龍・道場・曇鸞・大海・斉朝の上統（法上）の六大徳の名を挙げている。そして、その中の曇鸞について臨終時における霊験を述べている。

法然は『選択本願念仏集』の二門章において[13]、まず道綽が聖浄二門の中、聖道を捨てて浄土に帰する文として『安楽集』を引いているが、その最後に、聖道家の血脈の如く浄土宗にも血脈があるとして、廬山の慧遠、慈愍、道綽・善導の三流を挙げ、さらに道綽・善導流によって師資相承の血脈を示すならば二説あるとする。一には菩提流支・慧龍・道場・曇鸞・法上―以上『安楽集』、二には菩提流支・曇鸞・道綽・善導・懐感・小康―以上唐・宗

両伝（道綽撰『続高僧伝』と賛寧撰『宋高僧伝』）と述べるが、法然は後説をとる。

（二）諸経所明念仏では、此彼の諸経（『観無量寿経』および他の諸大乗経典）に多くの念仏三昧を明かして宗（要門）となし[14]、その中の第四番目の文に念仏と諸行について始終両益の具欠を述べ、二行の褒貶を示している。第四に『観経』及び余の諸部に依るに、所修の万行但能く廻願して皆生ぜざるはなし。然るに念仏一行（門）をもって要路と為す。何となれば、聖教を審量（詳しく調べる）するに始終の両益有り。若し善を生じ行を起さんと欲はば則ち諸度を該す（六度＝六波羅蜜・万行を摂めている）。若し悪を滅して災を消すは総じて諸障を治す。故に下に『経』（観経意）に云く。「念仏の衆生を摂取して捨てたまはず、寿命尽きて必ず生ずと。」此を始益と名づく。終益と言ふは、『観音授記経』（意）に依るに云く。「阿弥陀仏は世に住したまふこと長久にして兆載永劫なるも、亦滅度したまふこと有り。般涅槃の時、唯観音・勢至有りて、安楽に住持して十方を接引せん。其の仏の滅度亦住世の時節と等同ならん。然るに彼の国の衆生は、一切仏を覩見したてまつる者有ること無し。唯一向に阿弥陀仏専念して往生する者のみ有りて、常に弥陀現に在まして滅したまはずと見ると。」此れ即ち是れ其の終時の益なり。修する所の余行、廻向して皆生ずるも、世尊の滅度に覩ると覩ざると有り。後代を勧めて審量して遠益に沾しむる。

万行を回向して往生するものは、阿弥陀仏の入滅の相を見て終益がなく、念仏の衆生のみが阿弥陀仏の不滅の相を見る終益があるとする。ここでは万行（諸行）往生と念仏往生の廃立が見られる。

しかし、念仏は必ずしも称名ではなく、念仏と観仏の両方を合わせた念観合論の場合が多い。前述した第一大門（四）宗旨不同には[15]「今此の『観経』は観仏三昧をもつて宗と為す」とあり、次に『観仏三昧経』を引いて「父王を勧めて念仏三昧を行ぜしめたてまつると。」とある。また（八）凡聖通往に『観仏三昧経』（巻九意）菩薩本行品

を引いて、[16]「若しは能く仏を礼せん者、若しは能く仏を念ぜん者、若しは能く仏を観ぜん者は、当に知るべし、此の人は文殊師利と等しくして異有ること無し。」と、念仏と観仏を並べて同意語として用いている。さらに第三大門（四）引証勧信[17]および第五大門（四）引証勧信[18]にも、それぞれ『観仏三昧経』（巻九意）を引いて、念観合論の意を示している。後に続く善導の出現によって、観仏を廃して称名を立てる念観廃立が示され、五正行の中に称名一行を因行とする称名正定業が示されるのである。

道綽の教学の背景には、末法思想が大きな影響を及ぼしていると思われる。第六大門（三）経教住滅[19]に、

第三に経の住滅を弁ぜば、謂はく。「釈迦牟尼仏一代、正法五百年、像法一千年、末法一万年には、衆生滅し尽き諸経悉く滅せん。如来痛焼の衆生を悲哀して、特に此の経を留めて止住せんこと百年ならんと。」（大経巻下意）斯の文をもって証す。

とあり、正法時代は釈尊入滅後五百年、像法時代は一千年、末法時代は一万年、そしてその後は法滅の世となるが、その法滅の時代においてもさらに百年、この『大無量寿経』の教えを衆生のために留め残しておくと述べられている。

次に、第七大門から第十一大門までの五大門では、西方往生を勧めている。[20]また最後の第十二大門では『十往生経』を引用し、それを証文として往生を勧めている。[21]

四、『教行信証』における『安楽集』の引用

親鸞の主著『教行信証』に『安楽集』が十八文引かれている。『教行信証』と『安楽集』を対照すると左記の如くになる。[22]

（『教行信証』―『真宗聖教全書』第二巻の頁数、『安楽集』―『真宗聖教全書』第一巻の頁数）

一、行巻大行釈（一六―一八頁）

（1）第一大門第四（三八一―三八二頁）―念仏功徳　「令観父王何念仏三昧（中略）一切三昧中王故也」

（2）第四大門第三（四一九頁）―諸障皆除　「如摩訶衍中（中略）一切諸障皆除」

（3）第五大門第一（四二二頁）―具足功徳　「『大経讃』云若聞（中略）至心稽首礼」

（4）第三大門第四（四一一―四一二頁）―引証勧信　「又如『目連所問経』（中略）依易行道矣」

二、行巻行一念釈（三五頁）

（5）第二大門第三（四〇一―四〇二頁）―十念相続　「十念相続（中略）此亦依聖教」

三、信巻真仏弟子釈（七六―七七頁）

（6）第一大門第二（三七九頁）―説聴方軌　「據諸部大乗（中略）常生仏前」

（7）第四大門第二（四一五頁）―念仏三昧　「依涅槃経（中略）而作受施」

（8）第四大門第二（四一六―四一七頁）―念仏三昧　「依『大智度論』（中略）願不離仏」

（9）第二大門第一（三八八頁）―発菩提心　「『大経』（巻下意）云凡欲往生（中略）生死有淪（輪）」

（10）第五大門第一（四二三頁）―念仏常行大悲　「『大悲経』（巻二意）云云何（中略）名行大悲人（也）」

四、証巻大証釈（一〇五―一〇六頁）

（11）第八大門第二（四三一頁）―浄土讃嘆勧往　「然二仏神力応亦（中略）頂礼平等力」

五、化身土巻（本）三経隠顕釈（一五三頁）

（12）第三大門第三（四一〇頁）―浄土一門通入　「我末法時中（中略）可通入路」

（13）第七大門第二（四二九頁）―聖道門難証　「未満一万劫（中略）獲報偽也」

六、化身土巻（本）聖道釈（一六七―一六八頁）

（14）第五大門第一（四二一頁）―聖道門難行道　「然修道之身（中略）故名難行道」

（15）第一大門第一（三七八頁）―時機相応・懺悔修福　「明教興所由（中略）有善法得堅固」

「計今時衆生（中略）恒懺悔人」

（16）第六大門第三（四二七頁）―末法経典住滅　「弁経住滅者（中略）特留此経止住百年」

（17）第三大門第三（四一〇頁）―浄土一門通入　「我末法時中（中略）可通入路」

七、化身土巻（末）後序（後述）（二〇三頁）

（18）第一大門第一（三七九頁）―真言助修往益　「採集真言助修（中略）無辺生死海故」

初めの一、行巻大行釈には四文引かれる。（1）第一大門第四は念仏功徳を表す。『観仏三昧経』の中、釈尊が浄飯王に対して、諸仏の出世に三種の利益があると述べられるが、原文は二種の利益となっている。また二つ目の利益には、「若し衆生が称念し観察すれば、（中略）意の所楽に随ひて常に浄土に生じ、乃至成仏す」の文にある「称念」の語はこれも原文には見当たらない。[23] さらに『華厳経』の三つの譬喩に出てくる「行念仏三昧」の語および三毒の譬喩にある「念仏三昧は一切三昧の中の王である」という文も原文にはない。[24] 道綽はあえて原文の菩提心の中にこの念仏三昧を行ずるという言葉を付け加えて、念仏三昧の功徳を強調しているのである。親鸞はこれを信心と念仏の関係と見られたと思われる。

（2）第四大門第三は諸障皆除を表す『摩訶衍（まかえん）』すなわち『大智度論』によって、念仏三昧は貪欲・瞋恚・愚痴

の三毒の煩悩をすべて除き、また現在・過去・未来の三世のあらゆる障を除くと述べる。

（3）第五大門第一は具足功徳を表す。曇鸞の『讃阿弥陀仏偈』の偈文八句をそのまま引用する。前の四句は『大無量寿経』弥勒付属の文により、また後の四句は『同』往覲偈によっている。曇鸞の著述である『讃阿弥陀仏偈』は、そのまま『大無量寿経』の言葉であると仰がれたのである。阿弥陀仏の名を聞いて喜び満ちあふれ、心のよりどころとして一回でも念仏を称えればその人は大きな利益を得て功徳が身に具わる。またたとえ世界中が火の海になったとしても、ひるまずに進み、阿弥陀仏の名を聞くならば、不退の位に至る。

（4）第三大門第四は引証勧信を表す。釈尊が目連に次のように述べられる。[25] 万川長流の草木がすべて大海に入るように、世の人々も生老病死の四苦を免れることはできない。仏教を信じないために数多くの仏が出現する国土に生まれることができない。無量寿国は往き易いが修行して往生する人がいない。かえって九十五種の邪道の教えに随っている。この人を「無眼人」・「無耳人」というのである。経文にこのようにあるから、自力の難行を捨てて他力の易行道に入ることを勧められるのである。

次の二、行巻一念釈の（5）第二大門第三は十念相続を表す。この文は『往生論註』上巻の終りにある八番問答[26]の中、第八問答の答えによっている。多念相続を示されたものであるが、一念が自然に多念に及ぶので、一念と多念が同一であることを述べる。『観無量寿経』に十念とあるが、これは十遍（十回）の意ではなく仏の心の中にある数の名で、十念そのものは我々は知ることができない。称名を積み、他へ心を散らさず一心に思いを凝らせば、往生の業事は成就する。信心決定して称名する人は数を決めてなくてもよいが、未信の人は数を決めて称えてもよい。すなわち一念多念にとらわれなくてもよいと述べる。

続く三、信巻真仏弟子釈には五文ある。各引文は、真仏弟子を助顕して現生の利益を述べている。

（6）第一大門第二は説聴方軌（教えを説く者と教えを聞く者の心得）を表す。『大集経』を引いて、正しい説聴をなすものは、仏法を紹隆することになり、常に仏前に生じると述べる。

（7）第四大門第二は念仏三昧を表す。『涅槃経』を引いて、諸仏が念仏の人に親しみを持って接すると、諸仏護念の益を助顕している。

（8）第四大門第二も念仏三昧を表す。第一番に、仏は無上法王、菩薩は法臣とし、尊重するのは仏であるから念仏すべきであると述べる。第二番に諸菩薩は報恩のために常に仏に近づくことを願うと述べる。第三番に、菩薩が因位の凡夫の時に悪知識によって悪道に堕してまだ出ることができない。後に善知識によって念仏三昧を行じたいと述べる。ここでは知恩報徳の益を助顕する。

（9）第二大門第一は発菩提心を表す。菩提心によって無始以来繰り返してきた生死輪廻を断ち切ると述べる。

（10）第五大門第一は念仏常行大悲を表す。『大悲経』によって念仏相続すれば命終に安楽浄土に生まれる。そして次々と勧めて念仏を行ぜしむれば、大悲を行ずる人と名付けると述べる。正しく常行大悲の益を示している。

また四、証巻大証釈の（11）第八大門第二は浄土讃嘆勧往を表す。釈迦如来と阿弥陀如来の果力の不思議は同じであるが、釈迦如来は自らの力用を示さず、阿弥陀如来の勝れた力用のみを説き、あらゆる衆生に阿弥陀如来を讃嘆して帰命することを勧められている。そのために曇鸞も西方浄土の阿弥陀如来に帰命され、『讃阿弥陀仏偈』を著された。[27] 引用の偈頌は八句からなり、初めの四句は、安楽浄土の声聞・菩薩・天人・人間はみな智慧明かである。すがたかたちは同じであるが、他方国土に順じてそれぞれの名がある。顔かたちが端正で他に比べようがなく、美しいことは人天のたぐいではない。虚無の身、無極の体という極めて勝れた身体であるから、平等力を持つ阿弥陀仏に礼拝すると述べる。

また五、化身土巻（本）三経隠顕釈には二文連引されている。(12) 第三大門第三は浄土一門通入を表す。『大集経』月蔵分によって末法の時代には行を起こし道を修する聖道の教えは誰も証ることができず、ただ浄土の一門のみ証りに通入できる路であると述べる。

続く (13) 第七大門第二は聖道門難証を表す。一万劫の長い修行が成就しないうちは、迷いの世界を離れられない。なぜなら迷いの世界に沈み、懸命に行を修めても、得られる果報は偽でしかない、これが聖道門の教えであると述べる。

六、化身土巻（本）聖道釈には四文引かれる。

(14) 第五大門第一は聖道門難行道を表す。仏道を修める者は一万劫を経て不退の位に至る。今の凡夫は風が吹けば飛ぶような軽い毛ほどの信心しかなく、名ばかりの菩薩であるといわれ、あるいは不定聚、外の凡夫といわれている。さとりに対して決定しておらず、また煩悩を少しも断っていない外の凡夫、十信の菩薩である。『菩提瓔珞経』によれば、菩薩の位を一段一段と昇り続けなければならないから、これを難行道というのであると述べる。

(15) 第一大門第一―時機相応を表す。[28] 教が時機に相応すれば修し易いが、教が時機に不相応なれば修し難く証りに入ることは難しいと述べ、その後に『正法念経』[29]と『大集月蔵経』を連引される。『正法念経』では行者が証を求めるには、時と方法を考えなければならないとし、湿った木からは火を出すことができない。また乾いた薪（まき）からは水がでない。それはともに時を得ていないし智慧がないからであると述べる。

『大集経』月蔵分では五箇五百年説を説き、今の衆生は第四の五百年にあたり、懺悔修福し、仏の名号を称える時代の者である。一声の称名念仏するならば、八十億劫の生死の罪を除くことができる。ましてやいつも念仏するならば常に懺悔して罪を除くと述べる。

（16）第六大門第三は末法経典住滅を表す。

経典の存続と消滅については、釈尊在世時代八十年、正法時代五百年、像法時代千年、末法時代一万年を経れば、修行する者も仏の教えもなくなってしまうが、釈尊は苦しむ衆生を哀れんで、この『大無量寿経』をいつまでも留めておかれると述べる。

（17）第三大門第三は浄土一門通入義を表し、すでに前述している。

七、化身土巻（末）後序（後述）

（18）第一大門第一は真言助修往益を表す。

真実の言葉を集めて往生の利益の助けとしたい。なぜならば、先に生まれる者は後の者を導き、後に生まれる者は前の者のあとを訪ね、しばらくも休むことなく生死の大海を超えて、救われるためであると述べる。

五、その他の著述における『安楽集』の引用

「正信念仏偈」道綽讃（四五）「念仏正信偈」道綽讃[30]

道綽決聖道難証　唯明浄土可通入　万善自力貶勤修　円満徳号勧専称
三不・三信誨慇懃　像末法滅同悲引　一生造悪値弘誓　至安養界証妙果

道綽、聖道の証し難きことを決して、唯浄土の通入すべきことを明かす。万善の自力勤修を貶す。円満の徳号専称を勧む。三不・三信の誨慇懃（おしえおんごん）にして、像末・法滅同じく悲引す。一生悪を造れども弘誓に値（もうあ）ひぬれば、安養界に至りて妙果を証せしむといへり。

『入出二門偈』[31]

道綽禅師　玄忠寺

道綽和尚解釈曰　『大集経』言我末法　起行修道一切衆　未有一人獲得者
在此起心立行者　則此聖道名自力　当今末法是五濁　唯有浄土可通入
今時起悪造衆罪　恒常如暴風駛雨　本弘誓願令称名　是為穢濁悪衆生
是以諸仏勧浄土　縦令一生造悪業　三信相応是一心　一心淳心名如実
若不生者無是処　必得往生安楽国　生死即是大涅槃　則易行道名他力

道綽和尚解釈して曰く、『大集経』に言はく、我が末法に、行を起し道を修せむ一切の衆、いまだ一人も獲得するものあらじと。此に在りて心を起して行を立てむは、則ち此聖道なり、自力と名づく。当今は末法にしてこれ五濁なり。ただ浄土ありて通入すべしと。今の時悪を起し衆罪を造ること、恒常にして暴風駛雨のごとし。本弘誓願に名を称せしむるは、これ穢濁悪の衆生のためなり。ここをもつて諸仏、浄土を勧めたまへり。たとひ一生悪業を造れども、三信相応すればこれ一心なり。一心は淳心なれば如実と名づく。もし生ぜずは、この処なけん。必ず安楽国に往生を得れば、生死即ちこれ大涅槃、則ち易行道なり他力と名づくとのたまへり。

『高僧和讃』道綽讃[32]

（一）本師道綽禅師は　聖道万行さしおきて　唯有浄土一門を　通入すべきみちととく
（二）本師道綽大師は　涅槃の広業さしおきて　本願他力をたのみつゝ　五濁の群生すゝめしむ
（三）末法五濁の衆生は　聖道の修行せしむとも　ひとりも証をえじとこそ　教主世尊はときたまへ

(四) 巒(鸞)師のおしへをうけつたへ　綽和尚はもろともに　在此起心立行は　此是自力とさだめたり
(五) 濁世の起悪造罪は　暴風駛雨にことならず　諸仏これらをあはれみて　すゝめて浄土に帰せしめり
(六) 一形悪をつくれども　専精にこゝろをかけしめて　つねに念仏せしむれば　諸障自然にのぞこりぬ
(七) 縦令一生造悪の　衆生引接のためにとて　称我名字と願じつゝ　若不生者とちかひたり

『唯信鈔文意』(33)

如来尊号甚分明　十方世界普流行　但有称名皆得往　観音勢至自来迎(五会法事讃巻本)

「観音勢至自来迎」といふは、南無阿弥陀仏は智慧の名号なれば、この不可思議光仏の御なを信受して憶念すれば、観音・勢至はかならずかげのかたちにそへるがごとくなり。この無礙光仏は観音とあらはれ、勢至としめす。ある経(安楽集巻下所引須弥四域経)には観音を宝応声菩薩となづけて日天子としめす。これは無明の黒闇をはらはしむ。勢至を宝吉祥菩薩となづけて月天子とあらはる。生死の長夜を照らして智慧をひらかしめんとなり。

(宝)応声菩薩と(宝)吉祥菩薩について

『安楽集』第六大門第二義推(意義の上から推しはかること)(34)

故に『須弥四域経』に云く。「天地はじめて開くる時、未(いま)だ日・月・星辰有らず。縦(たと)ひ天人来下すること有れども、但項(うなじ)の光を用(もちひ)て照用す。爾(そ)の時人民多く苦悩を生ず。ここにおいて阿弥陀仏、二菩薩を遣はす。一は宝応声と名づけ、二は宝吉祥と名づく。すなはち伏羲・女媧是なり。

『教行信証』化身土巻(末)(35)

二皇総べて化して須弥四域経云く　応声菩薩を伏義とす　吉祥菩薩を女媧とす

『浄土和讃』諸経讃[36]

大聖易往とときたまふ　浄土をうたがふ衆生をば　無眼人とぞなづけたる　無耳人とぞのべたまふ

『御消息集』第四通[37]

釈迦如来のみこと（『目連所問経』）には、念仏するひとをそしるものをば、「名無眼人」ととき、「名無耳人」とおほせをかれたることにさふらふ。

『御消息集』第五通[38]

釈迦如来（『目連所問経』）は「名無眼人、名無耳人」ととかせたまひてさふらふぞかし。

また「正信念仏偈」と「念仏正信偈」にも同文の八句が述べられている。「正信念仏偈」（「念仏正信偈」）の第五句の「三不・三信誨慇懃」の中に「三不・三信」とあるが、これは三不信と三信のことで、曇鸞の『往生論註』下巻の「起観生信章」の中にある「三不信」を道綽が承けて、改めて「三信」の重要さを述べたものである。天親の『浄土論』に述べる五念門の第二番目の讃嘆の文「称彼如来名、如彼如来光明智相、如彼名義、欲如実修行相応」（彼の如来の名を称し、彼の如来の光明智相の如く、彼の名義の如く、実の如く修行し相応せむと欲ふが故なりと）を解釈するところで述べる。無碍光如来の名号は破闇満願の徳があるが、称名憶念しても無明があり願いが満たされないのは、不如実修行と不名義相応のためである。その理由は、二不知と三不信とする。すなわち二不知は阿弥陀如来が実相身（自利）・為物身（利他）の仏身であることを知らないことである。また三不信は信心が淳心・一心・相続心ではないと述べる。道綽は『安楽集』第二大門（三）広施問答の箇所に引用しているが、親鸞の『教行信証』信巻には道綽の『安楽集』でなく、曇鸞の『往生論註』から直接引用されている。しかし「正信念仏偈」や後述する『入出二門偈』・『高僧和讃』には、曇鸞と道綽の深い関係を示すために「三不信」と「三信」を道

綽讃で述べられたものと思われる。

『入出二門偈』道綽讃の第十一句には、「三信相応是一心」と「三不信」の否定表現を「三信」と肯定表現で述べる。そしてさらに、『往生論註』の意を承けて、「三信」は天親の『浄土論』冒頭にある「世尊我一心」の「一心」と同じであると述べている。後に親鸞は『教行信証』信巻にある『大無量寿経』第十八願文の「至心・信楽・欲生」の三心と天親菩薩の「一心」、すなわち三心即一心の教えに展開すると思われる。

次に『高僧和讃』道綽讃はわずか七首しかなく、七高僧の中ではもっとも少ないが道綽の教えがその中に充分含まれている。

また『唯信鈔文意』には『安楽集』第六大門第二義推および『教行信証』化身土巻（末）に引く『須弥四域経』を通して、観音菩薩―(宝)応声菩薩―伏義、勢至菩薩―(宝)吉祥菩薩―女媧にも言及している。

さらに『浄土和讃』諸経讃、『御消息集』第四通・第五通には『安楽集』第三大門第四の引証勧信の文を通して『目連所問経』の文を引いている。

註

（1）『大正蔵』第五〇巻五九三頁C―五九四頁b
（2）『真聖全』第一巻三七七頁
（3）『同』三七八―四四〇頁
（4）『同』四〇〇―四〇五頁
（5）『同』三七八頁
（6）『同』三八一―三八二頁
（7）大田利生氏「諸師における念仏思想」（『龍谷大学論集』第四五九号）

(8)『真聖全』第一巻三八二頁
(9)『同』三八二―三八三頁
(10)慧遠『観無量寿経義疏』（『大正蔵』第三七巻一七三c）、智顗『観無量寿経疏』（『大正蔵』第三七巻一八八b）
(11)『真聖全』第一巻四一〇頁
(12)『同』四一三―四一四頁
(13)『同』九二九―九三四頁
(14)『同』四一五―四一六頁
(15)『同』三八一頁
(16)『同』三八一頁
(17)『同』四一〇―四一一頁
(18)『同』四二五―四二六頁
(19)『同』四二七―四二八頁
(20)『同』四二八―四三六頁
(21)『同』四三七頁
(22)早島鏡正氏　「道綽から親鸞へ」（『武蔵野女子大学仏教文化研究所紀要』第五号）参照
(23)『大正蔵』第一五巻六四七頁b
(24)『大正蔵』第九巻七七八頁c
(25)『目連所問経』について、梅原真隆著『教行信証新釈』巻上三三三―三三四頁の脚注に次のように述べられる。
現存蔵経中にある『目連所問経』一巻にはこの文はない。またこれは趙宋の法天の訳であって道綽の見るはずがない。梁の僧祐撰の『出三蔵記集』の「聞経録」に『目連所問経』一巻をあげているが、梁に欠本となっているから、これまた道綽の見るはずがない。『貞元録』の「偽妄乱真録」に『目連所問経』一巻がある。恐らくはこれを引かれたのであろう。山辺習学・赤沼智善共著『教行信証講義』教行巻二五八頁にも同文がある。
(26)『往生論註』『真聖全』第一巻三一一頁
(27)『讃阿弥陀仏偈』『真聖全』第一巻三五六頁

(28) 拙稿「親鸞聖人における時機観」（『日本仏教学会年報』第四九号）、および拙稿「親鸞と『大集経』」（『印度学仏教学研究』第四四巻第二号）参照

(29) 『正法念処経』七十巻。東魏の瞿曇般若流支訳。六道生死の因果を観じ、これを厭離すべきことを説く。

(30) 「正信念仏偈」『真聖全』第二巻四五頁、「念仏正信偈」『同』四四九頁

(31) 『入出二門偈』『同』四八三頁

(32) 『高僧和讃』『同』五〇七―五〇八頁

(33) 『唯信鈔文意』『同』六三九―六四一頁

(34) 『安楽集』『真聖全』第一巻四二七頁

(35) 『教行信証』化身土巻(末)『真聖全』第二巻一九六頁

(36) 『浄土和讃』『同』四九八頁

(37) 『御消息集』第四通『同』七〇一頁

(38) 『御消息集』第五通『同』七〇四頁

《参考文献》

著書

・内藤知康著　『安楽集講読』（平成一一年七月）　永田文昌堂

・渡邊隆生著　『安楽集要述』（平成一四年七月）　永田文昌堂

・梅原真隆著　『教行信証新釈』（昭和三〇年）　専長寺

・山辺習学・赤沼智善共著　『教行信証講義』（昭和二六年一一月）　法蔵館

論文

・矢田了章氏　「中国浄土教における教法表現」（『真宗学』第一一九・一二〇合併号、平成二一年三月）真宗学会

・大田利生氏　「『安楽集』と『往生要集』―仏教思想を中心として―」（『真宗学』第九九・一〇〇合併号、平成一一年三月）

・　同　「道綽浄土教の研究―浄土観を中心として―」（『真宗学』第一一一・一一二合併号、平成一七年三月）

・　同　「中国浄土教と『般舟三昧経』」（『真宗学』第一一九・一二〇合併号、平成二一年三月）

・殿内　恒氏「諸伝記等に見る道綽禅師―その教学的姿勢の背景―」（『行信学報』通刊第八号・復刊第三号、平成七年五月）
行信仏教文化研究所
・同　「道綽浄土教の成立背景」（『宗学院論集』第七一号平成一一年三月）本願寺派宗学院